こんにちは牛越です

【第166回】

水道事業100年

大町市長
牛越 徹

大町市の水道事業は、大正13年に居谷里水源から中心市街地に水道を引き給水が始まり、今年100年を迎えました。今月2日、恒例の水源感謝祭の日に記念式典を開催し、市民の暮らしと産業活動を支える基盤を築いてこられた、先人たちのご努力に深く敬意を表し、感謝する機会といたします。

給水開始後も産業の発展と人口の増加に伴う水需要の増大により、昭和29年の新生大町市の誕生を機に、給水区域の統合拡大を図るとともに、水源の開発が進められ、並行して各地区に点在していた簡易水道が統合されました。

八坂地区では昭和44年の中央簡易水道から、また美麻地区は54年の二重地区から、順次各地区の整備が進み、令和元年に至り両地区の簡易水道は市の公営簡易水道として統合されました。

こうした長きにわたる水道の歴史は、100周年を記念して製作された「信濃大町水物語」に克明に記されています。

ところで豊富な大町の水は、将来も尽きることがないのでしょうか。5月、大町の水について大町山岳博物館の鈴木啓助名誉館長のご講演がありました。鈴木先生は地球物理学の雪氷学や水文循環学の専門家です。ご講演で先生は、赤道に近い低緯度地域で降水量が多く、南北30度より高緯度で降水量が多いのは日本だけで、冬は日本海の暖かい対馬海流からの水蒸気が、乾いて冷たいシベリアからの季節風によって雪雲となり、それが日本列島の山脈にぶつかり、大雪を降らせるというメカニズムを解説されました。

気温については、1979年からの40年間の観測で、大町では春から夏、秋にかけて平均気温が上昇する一方、冬は変動が見られず、また、春から秋までの平均降水量には変動がなく、反面、冬の降水量は増加傾向にあるため、大町の水資源は今後も大丈夫とのことでした。

曹洞宗の開祖道元禅師の言葉に「杓底の一残水、流れをくむ千億人」という教えがあります。天の恵みの水はみんなのもの、これからも大切に利用していきたいと思います。